
最高電波家族（超能力バトルモノ）

やった

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最高電波家族（超能力バトルモノ）

【Nコード】

N8935Z

【作者名】

やった

【あらすじ】

超能力ものの群像劇をかこうとしたやつの途中まで

きっと、アレは世界を滅ぼすために生まれてきたのだろう。

真新しい、絵の具のような質感を持った紅色だった。一面が無機質な灰色の壁に覆われた研究棟の通路。その床をゆっくりと覆っていくどろりとした血の赤が、蛍光灯の光を跳ね返す。

血が染み込んでいくのは床だけではない。そこには無数の死体が転がっていた。

白衣を纏った首のない胴。肘から先しかない腕。腰までしかない下半身。それは常人ならば目を覆いたくなるような光景であり、逃げ出したくなるような状況だった。

東郷祐作（ひがしむね）は、しかしそんな壊れきった密室を楽しむ。百メートル先のアレを眺めれば眺めるほどに、高鳴る鼓動が抑えらなかつた。ピチャリ、ピチャリ。血液が跳ねる音なんて、東郷にとってはさして珍しいものではない。脱走劇には付き物な上、ここはいわゆるそういう施設だ。そういうものを研究している。

しかしここは最下層。他の実験体が脱走するのとはわけが違う。局長として非常に興味深く、なかなか面白い出来事だが、そろそろいい加減大人しくして貰わないと困る。

「学べ、イヴ。世界を統べるのは貴様ではない。我ら人間だ」
「……………」

イヴ。それがアレの通称だった。辛うじて人の形を保っている怪物。服は纏わず、白く長い四肢に美しい女性の肌。しかしその頭部は箱によって依然封じられたままである。

箱とはすなわち、鉄色の立方体のことだ。イヴの頭部を覆うその物体は、元は外界から酸素を絶つ目的で作られたものだった。

東郷はかつてイヴに施した無呼吸実験のことを思い返す。イヴ

は呼吸なしでどこまで生きられるのか？ そっとう実験だった。

しかし結果は未だに出ていない。今もなお箱の実験は続いており、イヴの肺に酸素は届いていないはずだった。それでもイヴは動く。動いている。つまるところ、あれは進化だ。

不老不死。実験中にそんな仮説が立った時点で、全ては滞り始めた。イヴに更なる実験を施せば、あらゆる方面での進化を早めさせてしまう可能性があるという。むしろ施設に繋いで置くために、進化は最小限に抑えられるべきではないのか 主任である、ハワード・ベレスフォード博士はそのような見解を示し、東郷はそれに異論を唱え続けていた。

そして、その結果がこれである。

愚かなハワード。イヴを繋いでおこうとした貴様が、イヴを開放してどうする。

遙か奥に転がるハワードの死体を、東郷は目を細めて見つめる。彼は勝手に最下層の禁止区域へ踏み入り、身勝手な理由でイヴとのコミュニケーションを試み、そして殺されたのだ。

「と、東郷局長！ ダメです、主力装備が全て無効化されます！

こ、このままではっ

「ふん……重火器は無理か。実験で使いすぎたからな。抗体が出来ているのだから……」

小さく舌打ちをした後、ゆっくりと踵を返す。イヴとの間には既に厚さ五十センチの隔壁が三箇所から降り始めていた。東郷は元より撃ち殺すつもりなどない。隔壁が全て閉まるまでの間、イヴの興味を少しでも引いて足止め出来ればそれでいい。それが、使えない部下どもの役目だ。

イヴは遠距離攻撃手段を持っていない。ただ無差別に、近くの間を襲い、食らうだけ。

「ひ、ひいいいい！ く、く 来るなあああ……ア、アッ……？」

「た、たすけ……たすけ……テ……エ……」

ザシュツ、という軽やかな音は、誰かの首が跳んだことを示すも

のだった。自分には関係のないこと　そう判断し、東郷は振り向くことさえしない。

そうして狙い通り、全ての隔壁が降りきった。何人かが閉じ込められたが、どうでもいい。

「G3を噴出しろ。中の役立たずどもはどうなっても構わん」
「了解」

最下層のオペレーションルームにて、東郷は部下に命じた。自慢の顎鬚を撫でながら、ガス噴出の様子をモニターを通して眺める。G3はイヴに使用したことのない、非常用の強力な猛毒ガスである。一呼吸であらゆる命を殺す毒　それでもイヴは死なないだろう。しかしその方が都合がいい。動きは絶対に止まるはずであり、そこを捕らえれば脱走劇は終いである。

だが、人生とは総じて予定通りにいかないものだ。

「バ……バカな……こんな……こんなことが……局長、G3が効きません……!!」

不思議と、笑いが止まらなかった。モニター越しに破壊された隔壁を眺める東郷。

「そうか……ついに人類の科学を超えたか。面白い……貴様はこれより世界の敵だ!!」

もはや捕らえる手段は無くなっていた。ならば、殺すしかあるまい。

「局長……いません……!!　どこにも……!!」

「もう一度言ってみろ……」

処分を決定してから数刻。東郷は部下の首元を掴みあげ、低い声で尋ね返した。

「逃げられました……裏口から……やはり、ハワード博士が彼女に何か入れ知恵を……」

怯えながら白衣を着た男が答える。逃げられた。何とも分かりやすい。つまりそれが今回の結末だった。足止めに失敗し、イヴから

隠れ、再度足止めをし、繰り返し、その結果。

「……そうか、そういうことか。ハワードはこうなることを予想していたのだな。死んでなお、世界に抗う気が……！！ 実に……愚か……！」

ようやく東郷はハワードの意図に気付く。彼女はハワードの実の娘だった。おそらくハワードは、どうしても娘を逃がしたかったのだろう。

それこそ。たとえ、世界が滅びることになったとしても。

「イヴめ………好きにはさせんぞ。部隊編成、生き残った者全員を、すぐに集める！」

* * *

きつと、アレは世界を創るために生まれてきたのだろう。

アルガス・ブローンは静かに唇を震わせる。認められなかった。よもや、『ただのガキンちょ二人』にアレを奪われただなんて。東郷率いる日本政府の独立法人研究機関、通称 サクリファイアスが抱える化け物。アルガスがそんな異形研究に対抗し、別の方向性から不老不死を研究し始めたのが十年前。

テーマは人の手による人の進化だった。長い年月を重ね、ようやく完成した矢先だった。

「んだこれ？ うお、中にお宝！」

「え、なにそれ宝石じゃん。ちよつとそれウチに寄越せし」

「やだね。お前にはその納豆がお似合いだぜ」

「納豆なめんなよ！ むしろなめてみる、あまりのおいしさに悶えるぞ！」

「あまりの臭さに悶えそうだ！」

映像に残っていたのは声のみだった。福地兄妹を光学的に捉えることは出来ない。熱を感知するタイプの機銃は先月起きた誤作動発砲事故で全面撤廃しており、セキュリティシステムもたまたまメン

テナンスの最中だった。

結果、有り得ない程簡単に、アルガスは彼らを施設から逃してしまふ。

反政府の暗躍組織 アルテミス が創られて以来、最も大きな過失だった。

「賢者の石 は我らの野望、その礎！」

アルガスは拳を握り締め、回想する。それは人を進化に導く古代の記憶だ。エジプトより発掘された非公開の 百二十二番元素 を加工し、練成。その過程で手に入れたのが サタリウム や レゾルアシウム という名の鉱石である。

『これらの鉱石は、ある条件下で現実を高度に上書きする性質を持つ』。部下の科学者が打ち立てたその仮説は間違いないと思われた。条件、効果範囲、効果時間など、未だ不明な部分が多いが、しかしそれでも『汎用的に異能を行使出来る状態』にまで持つてくることが出来た。

つまるところ、福地兄妹が盗んでいった宝石箱の中に入っているのは。

「人類を進化させる魔法……！！！」

アルガスは唇を噛み締める。宝石箱は売り払えば国が買えるような代物だった。そもそも 百二十二番元素 自体が有り得ない程に稀少な上、そこから鉱石を練成出来たことだって、条件を見つけたことだって、言ってしまうえば偶然の産物である。 百二十二番元素 を手に入れたところで、運が味方をしない限り魔法に変わることはないのだ。

その完成品を失う訳にはいかない。取り返さなければならぬ。

「福地兄妹を探せ 無論、生死は問わん！」

* * *

「……って感じデス。竹之内サン」

「なるほど。それでお前さんはその魔法とやらを独り占めすべく、こんなことを……」

深夜、とある海岸。数百に渡る死体が、墜落したヘリコプターとともに遙か沖の方で浮かんでいた。

ややカタコトの男　フレイディ・ブラックバーンは、身長百九十センチの巨漢である竹之内に比べると、十数センチ程低い。流れるような金色の長髪を風に靡かせながら、フレイディはその顔を覆っている白一色の仮面を人差し指で優しく撫でていた。

一方、竹之内丈はハアとため息を吐く。短い黒毛の前髪、赤のメッシュ部分をいじりながら、目の前の殺戮ジャンキーを眺める。「にしたつてお前さんと結構アホだろ？　賢者の石　とかさ、

なんでそんな大事なもんを一箇所に集めて保管しておくかね……」

「アア、効果を重複させることが可能らしいデスよ。で、その実験の最中ダツタ、と」

「はーん……不運だねえ、オタクの機関。何が不運つて、その魔法とやらを取り戻すための兵隊さんが、全員味方に殺されちゃったつー辺りが……」

竹之内は苦笑する。味方のヘリコプターに爆薬を仕掛けて全滅させた男。それが他でもない、目の前の不気味な仮面男なのだった。ちなみに仮面には一切穴が空いていない。

そして笑えることに、フレイディは任務を続けるつもりが全くないようだった。賢者の石　を自分のモノにし、転売するつもり満々なのだという。

「サテ……貴方の番デスよ、竹之内サン。　サクリファイス　は何のために動いてルのデス？」

「……そうだな。こっちは相当やっかいやっかい。世界平和の危機ですよつと」

竹ノ内はつまらなそうに、イヴに関する逃走事件について乱雑に語ってみせた。

「そうデスカ……それで、どちらへ？」

竹之内が逃げたイヴについて説明し終わると、早速フレディが質問を投げてきた。

「渋谷だ。怪死が広がってる。間違いなくイヴはその辺りにいるはずだぜ」

「アララ……奇遇デスね。私も渋谷に行こうと思ってタンですヨ」「買い物か？」

「探し物デス」

「へえ……なら気をつけるこつたな。箱を被った化け物に、よ？」

「竹之内サンこそ、福地サン見つけたら捕まえておいてクダサイね？」

「福地ねえ……ナツい名前だぜ、全く」

竹之内は夜空を見上げながら懐かしむ。福地兄妹は、元々サクリファイスの人間だった。しかしややあつて彼らは脱走し、その後 アルテミス に捕まり また逃げ出して。

煩いが、しかし年齢以上に頭がいい双子。それが竹之内が抱く、彼らのイメージである。

「ところデ……」

不意に、フレディの空気が変わる。

「ダンスでも踊りませんか？」

「お、いいねえ」

その言葉に釣られるようにして、竹之内の視線が鋭さを増した。

「もし殺しちまったら、てめえの代わりに 賢者の石 も頂いとくわ」

「モシ殺してしまつてモ、私は化け物なんて放置しますケドネ」

思わず口の端から笑みが零れる。このフレディの余裕ぶつた辺りが何とも小憎たらしい。

竹之内は脚に力を入れる。そうして、二人は同時に砂を蹴った。

「売つたらいくらになるかなあーっ!？」

「貴方の臍物ヨリは高く売れる思いマスがネ……!!」

爆ぜ上がる火焔。飛び交うナイフ。

時刻はとうに〇時を過ぎている。そういえばもう二十四日、今日はクリスマスイヴだ。

「んで日本のイヴってのは恋人の日なんだがよ！ 一体何人くらいとデートできっかな!?」

「残念なガラ、私一人で終わりデスね……!!」

・ 一話 (25P)

1

なんでこの俺が、クリスマスイヴなんていう欧米的な名称のイベントを、よりによってコイツと過ごさにやらんのだ。

鵜方総真うがたそうまは、顔をひくひくと引きつらせながら渋谷の街を歩いていた。

別に一人ではない。かといって相手は男でもない。そして決して不細工でもない。

あくまでも客観的に言うならば、美少女と二人きりで過ごすクリスマスイヴ、ということになるのだろう。しかも腕まで組む始末であり、傍から見ればラブラブカップル間違いなしだ。

にも関わらず鵜方が乗り気でない理由は、まあいろいろある。

「総真……………私、今、渋谷で一番幸せハッピー……………そんな気持ち……………」

「そうか。じゃあ俺は水槽で一番溺れかけグツピーだな」

筒木夜威子つづみやいこ。それが、この口数の少ない女子中学生の名前である。

身長は鵜方より三十センチも低い、百五十五。黒髪好きだと公言する鵜方に喧嘩を売っているとしか思えない、ブリーチを四回くらいかました眩しいくらい金の髪。髪はストレートで、前髪はパツツン。主に白系のゴスロリファッションを好むが、本日に関しては空気の読めないサンタコスプレなのだった。頼んでもいないのに、

ミニスカである。

瞳は開けば大きいのが、大体いつも中途半端にしか開いていない。無口っぷりも相まって、他の中学生からは『氷の人』と呼ばれているらしかった。せめて『氷の美少女』と呼んであげればいいのに。いや、どうでもいいけれど。まあ、とにかくにも、高校三年生になる鵜方にとって、三歳年下の夜威子は恋愛対象には成り得ないのだった。断言する。

ワックスいらずで立ち上がる黒の短髪をポリポリと掻きながら、鵜方はため息を吐いた。

「いい加減帰らねえ？ 絶対お前のこと探してるぜ、朝護のヤツ」
「……………大丈夫……………今日は目立たない格好をしてきた……………見つからない」

といつつ、サンタのフリfrisスカートは情熱の赤を主張していた。周りの視線独り占め状態である。夜威子の甘えん坊ぶりは昔からだったが、鵜方がアメリカ留学から帰ってきてからは更に悪化をしていた。鵜方が一人暮らしを始めたのをいいことに、しょっちゅう家に上がり込んでくる。鵜方のマンションは渋谷から数駅のところであり、現在地であるセンター街からも、走って帰ることが出来る距離だった。

一方、兄と二人暮らしをしている夜威子の家は神奈川の西部にあり、鵜方からしたら『毎度毎度よく来るな』という感じだった。しかも来るときは連絡がない上、狙ったかのように終電でやってくるので、追いつかずに泊めたりすることもよくある。ぶち切れた兄、筒木朝護（つづきあさむね）が、原付きに乗って物凄い形相でやってくるのも、もはや鵜方にとっては見慣れた光景だった。

まあ、とにかくさっさと帰りたいわけだ。

中学生とクリスマスイヴデートなんて、万が一友人に見つかったら死ぬるし、夜威子の兄である朝護に見つかっても死ぬる。そもそも、夜威子は嬉しそうに人の歯ブラシで歯を磨くような恐怖の少女であり、この先起こり得るイベントを考えただけで、ゾッとする

のだった。

鵜方は懸命に、一人で帰る言い訳を考える。せめて、まだ終電があるうちに。

「あっ……やべっ。家帰って見たいテレビあるんだっただ」

「……ハードディスクに、全部録画済み。DVDにして貸してあげる……」

「……。あっ、俺今日のラッキープレイス自宅だった」

「……大丈夫。双子座はラッキーカラーがグリーンだから……ツリーの色……」

いや、人の星座で占いをするなど。

「……。何か体調悪い。腹痛え……やべえ、帰らないと！」

「……じゃあ私が死ぬほど、一緒にお腹を撫で回してあげる……泣くほど……」

「怖えつつんだよ！」

耐え切れずツッコミを入れる鵜方。どうにもこうにも逃げられそうになかった。なら最初からこんなところに来なければいい、という話なのだが、そもそも目覚めたら目の前にお台場のクリスマスツリーがあったわけで、つまりはそういうことだった。

どうやら手足を縛られ眠らされたまま、モノレールに乗せられたようだ。笑えない。ちなみに今現在は移動して、渋谷の何ちゃらっていうイルミネーションを見にきているわけで。

鵜方が実に三年ぶりに『彼女』を見たのは、そんな時だった。

「いいじゃねえか、遊ぼうぜ！」

「はうろうう……や、はうあう……っ」

夜威子とは違う、本場のプラチナブロンド。さらりと乾いたような銀色が、腰の辺りまで伸びていた。大きくパツチリと開いた瞳からは、すらりと長い色白の四肢とは対照的に、幼さを感じさせる。身長は夜威子より十センチ程高く、鵜方より二十センチ程低い。

え、っーか、何やってんの。なつかしすぎる。よく絡まれるあたりは相変わらずだった。

相手の人数は三人。バカ面引っさげて実に有意義なイヴを過ごしてらっしゃる様子で。

まあ、ナンパ野郎なんてどうでもいいか。そんなことより。

「おい、キボンヌ！ なつかしいな、俺のこと覚えてるか？ いつから日本に？」

鵜方は状況を無視してテンション高めに少女に近付いていく。バカ面トリオが怪訝そうな表情を見せたが、それらを完全にシカトした。

「はうあ……？ え……あれ……ソーマ………？ え、ウソ、ウソウソ……！？」

「そうそう、ソーマ・ウガタ！ えっと、んでもってコイツが俺の妹分の……」

「……嫁の夜威子」

なんだか都合よく言い直す夜威子。鵜方は振り返って絶句しつつ、視線を少女へと戻した。

そんな様子をよく思わないのが、いわゆるナンパ連中なわけで。

「おい……シカトしてんじゃねえぞ」

リーダー格と思われる金髪の男が、不意に鵜方の胸元を掴む。鵜方の方が身長が高いため、浮きはしなかった。

「悪い悪い、背景かと思っちまった。なあ、夜威子？」

「………うん、いきなり背景が動いたから、びっくりした」

「てめえ……殺すぞ」

「素手でか？ かつこいいいなオイ」

「ざけんな……！！ ホントにぶっ殺してやるつか！？」

ポケットよりナイフを取り出す男。あーあー、しまった。挑発しすぎちまった。

「お前さ、銃刀法違反してしってつか？」

「ああ？ 知らねえよ！」

「そりゃあよかった。なら教えてやるよ」

鵜方は言いながら、つま先で男の肘を蹴り上げる。呻き声が漏れ

た瞬間、身体を翻して回転。

「俺によつてぶつ飛ばされる!!」

雑なフォームでの回し蹴りが男の側頭部を捉える。鵜方はそのま
ま力任せに蹴り飛ばした。

「あ、あつくん！ あつくうーん!？」

「あつくんっていうのか。さーて、じゃ、あつくんの後とか追いか
けたいヤツは武器構えてー」

鵜方の迫力に、ただ場は静まり返る。結局、武器を構える者はい
なかった。

「あのあのあの……はうあう……ありが、ありあり、ありが」

「テンパリ癖直んねえーのなあ、キボンヌ。で、何してんだよ、こ
んなところで？」

男たちが去つた後、何事もなかったかのように鵜方が尋ねる。後
ろで夜威子からの負のオーラを感じつつ、しかし気にせず尋ねた。

なんせ鵜方が彼女と出会うのはアメリカ留学以来のことで、も
う一生会うこともないだろうと考えていたわけで。久しぶりに見る
彼女は、なんていうか、やはり可愛い。

思い出すのは、空港でボロボロと涙を零しながら、いつまでも
手を振っていた彼女の姿。鵜方と彼女は同じジュニア・ハイスクー
ルに通っていて、とても仲が良かった。

酒や麻薬や煙草を強制したり、強姦したり、強盗したり。そん
な連中ばかりを見てきて、日本人というだけで何度も身包みを剥が
された鵜方は、基本的にアメリカという国が嫌いである。

しかし、彼女だけは例外だった。最後の年になって、彼女が初
めてくれた誕生日プレゼントは熊の置時計で。鵜方はそれを今でも
大切に持っていた。

そういえばアメリカから唯一持ち帰ったものだった。そんな
ことをしみじみと思い返す。

知り合つたきっかけは確か、今日のようなナンパ事件。

「……わ、わ、わ、分からん！」

と、彼女の言葉。理由が分からないらしい。日本語も何だか無礼な感じだった。

「そうかそうか、分からないってことは記憶喪失か。でも俺のことは分かるんだな、よしよし」

「ほうあつ……!？」

鵜方は冗談を言いながら真顔で頭を撫でる。一方、顔を真っ赤にする少女。

「あいたたたたつ!？」

同時に後ろから、爪でつねられるのだった。犯人は夜威子。何しやがるコノヤロー。

「……ほうあ……あ、あの、あのあたし、不幸だ……!!」

突然ガバツと反転し、何故だかクラウチングスタートの構えを始めるプラチナブロード。

「おい、パンツ見えるぞ」

「あのあの、あたし、幸せ……っ！」

何やら意味不明な言葉を残しながら、いきなり全力ダッシュで逃走する奇人変人の姿がそこにあった。何が何やら分からない鵜方は、ただ呆然と立ち尽くす。つーか不幸なのか幸せなのかどっちだ。まあ、意思疎通が苦手なのは相変わらず、ということは良く分かったが。

「あーあ……もっと喋りたかったんだがな。ま、いいか、ピンクだったし……」

「……ピンク？」

「いや、パンツの話。じゃなくてこっちの話。………痛えっ！
噛みつくなっ！」

「……ふあみふいふえふあい。ひゅふっへふふお」

「しゃぶるのもナシだ！」

こっちはこっちで電波野郎なのだった。まったく今日一番の不幸、とばっちりである。

少女は脇目も振らずに走っていた。だめだ、あたし。泣いちゃ、だめ。

プラチナブロンドの髪を靡かせながら、少女は走り続ける。もうお金がない。何も買えない。何も食べれない。どこにもいけない。それでも。

行く先も分からないまま、ただただ現実を恐れて逃げてきた。

少女が少年　　鵜方総真に初めて出会ったのは、もう六年も前のことだ。とろくて鈍い少女は、しょっちゅうナンパやら何やら危険な目にあつてきたのだが、ことあるごとに助けてくれたのが、彼鵜方だったのだ。

困った人を放つてはおけない、サムライのような性格。少女が日本という国に興味を持ち、日本語という言葉を学ぶ気になったのも、全ては鵜方が始まりだった。

好きかもなあ、って思ったのは、果たしていつだったか。かつては実ることのなかった淡い恋心。ここで出会ったのも、あるいは運命の悪戯か。

神という存在を信じる少女にとって、それは無視できない、運命的な再会に違いなかった。

しかし。だからこそ少女は思う。　　巻き込んだじゃ、ダメ。

「はっ……………」

どこだか分からない公園のベンチで、縮こまり体育座りする少女。　　女。

つい、ぐうとお腹が鳴ってしまった。そのあまりの大きさに、思わず微笑む一人の青年。

「おや、アメリカン……？　　お腹デモ空いてるんデスか？」

細目の、爽やかな金髪の青年だった。瞳は澄んだように蒼く、優しい表情を浮かべている。服は上下とも漆黒で統一されており、右手には仮面のようなものを持っていた。

「はうあ……？ あのお、お前も、アメリカ？ お腹は……あのあの……いえす！」

同じ異邦人だと知って、少女の張り詰めた心が僅かに和らぐ。青年はにっこりと微笑み、

「そうデス。良かったら、差し上げマスよ」

未開封のあんパンを、少女へと手渡すのだった。

「え……あのあの……でも……あれ？」

パンに目を奪われた少女が顔を上げた時、既に青年の姿はなかった。

「……………ありがたき、幸せだ……！！」

少女はごくりと生唾を飲み、あーんと口を大きく空けて、それを頬張った。

「デモ……………マダ……………タリ、ナイ……………」

* * *

「クソ！ 鵜方……………何故だ……………何故僕は貴様に勝てない!？」

「……………私が、総真に永久に続く真実の愛の力を注いでいるから……………」

「なんだと……………無敵……………無敵じゃないかあつ！ 卑怯者！ 世間知らず！ 親知らず!!！」

最後のは単なる奥歯だな。そしてそんなぶっそうなエネルギー注がれた覚えはない。

「っていつか恥ずかしいから叫ぶな。警察が来るだろ」

「恥ずかしかつてるのは貴様だけだろう!」

「うっさい、悪いか！ 羞恥心は日本人の美德なんだぞ!」

渋谷駅から離れた路地裏。うっ伏せ状態なのが朝護で、見下ろしているのが鵜方だった。

数十分に及ぶ長い喧嘩は、しかし一方的な結末を迎えていた。キレたナイフのような朝護は、文字通りキレたナイフを取り出して

攻撃を仕掛けてきたのだが、過去、スラム街に連れて行かれて何度モリンチにあい、そこから這い上がってきた鵜方にとって、ナイフという武器はさほど怖いものではなかった。先刻の三人組の時もそう。鵜方はストリートファイトに長けている。

鵜方の飄々とした態度は、誰にも負けないという自信から生まれるものだった。

「さて。もういいだろ？ 兄貴が心配してんぞ。帰ったらどうだ、夜威子」

「……………いや。こいつ、私の兄ではない」

事態をこのまま上手いことまとめたかった鵜方。しかし、生憎の却下である。

「おいおい、すげえな！」

鵜方が騒々しい少年少女に出会ったのは、そんな時だった。

「見てたぜ見てたぜ！ アンちゃんどこぞのウルトラマンかよ！？」

「ま、パンピーにしちゃあ、やるじゃん。まだまだウチには及ばないだろうけど」

「いや希、お前の能力、普通のヤツ相手だと意味ねえじゃん」

「普通のヤツに興味ないもん。あんたこそただ透明になって、おっぱい見るだけの能力でしょ」

「普通のおっぱいに興味はない。覗きはD以上からだ。見損なうなよ」

「普通に見損なうたよ」

突然パツと現れたかと思うと、いきなり言い合いを始めたそっくり男女。

身長は鵜方より六十センチほど低く、どう見ても小学生だった二人揃って燃えるような赤毛で、少年の方は狂ったようにクセっ毛が立ち上がり、毛先が互いに主張しあっている。少女の方は同じく天然パーマだったが、少年と違って大人しく毛先が寝ていた。生意気な少年に、勝ち気な少女。そっくりな二人は双子だろうか？ しかしそれより、時刻は現在二十二時。

「おい……親は？ 迷子か？」

鶺鴒方が最初に心配したのはそれだった。渋谷のこんな時間に裏通りにいる子どもなんて。

「親はいないぜ！ 僕らはたった二人きりの家族なんだ！」

巨大なネックレスを人差し指で回しながら、少年の方がにかつと笑った。

「癪だけどね。大丈夫、ウチら頭いいしき。少なくともあんたらより、ずっと」

少女の方はフフンと鼻を鳴らしている。何とも生意気なガキんちよである。

「……………」

呆然と、そんな二人を見つめる夜威子。不意に彼女は前に進み、

「……………かわゆす」

二人のほつぺを同時につねる。

「あだだだだだだっ！ な、何しやがる！？」

「痛い！ なに！？ ほつぺ、ちよ、ほつぺえ！」

しかも、どうやら容赦なしだった。

「……………お持ち帰りしたい。じゅるり」

「ば、放してやれ夜威子！ じゅるりとか言うな！」

鶺鴒方が慌てて割って入る。すると少年少女は冷や汗をかきながら後退した。

「おい……貴様ら勝手に場の雰囲気を変えるな……！ 僕がいること忘れているだろう！？」

そんな最中、ゆっくりと立ち上がるのは朝護だった。鶺鴒方に伸ばされたばかりとはいえ、彼はまだまだ十分戦えるアピールをしている。ああ、まったく、次から次へと面倒な。

「あがつ！？」

すると突然朝護が唸りを上げて、目を半開きにしながら再び倒れてしまった。え、あれ？

「はははっ、悪者はこの福地元氣ふくちげんきが成敗しておいたさ！ そつとも

僕はその名の通り、元気を賭してこの地に福を振りまく男！」

「……！？」

思わず振り返る鵜方。いつの間にか少年　元気が、朝護の背後に回っていた。

「わー、元気がつけー。あ。ウチは福地希ね。ふくちのぞみこのバカの保護者やってま」

次いで、少女、希が鵜方の正面より勝ち気に微笑んだ。鵜方が言葉返せずにいると、

「で、アンちゃんはなんて名前？」

「可愛いウチが名乗ったんだぜ？　名乗れっ！」

二人が同時に鵜方に質問を投げかけてくる。

「え、あ　鵜方総真、高校生だ。んでこっちが、」

「総真の嫁、鵜方夜威子」

「じゃなくて赤の他人の筒木夜威子だ」

訂正に訂正を重ね合う鵜方と夜威子。

「カップルかあ、いいねえ、そういやクリスマススイヴだもんなー」

「おい、俺の話を聞いていたか？　少年よ」

「いや、それよか祝おうぜ元気。なんだっけ、えーっと、メリー結納！！」

「メリー結納！！」

グツと親指を上げながら、白い歯をきらりと輝かせたガキンちよ二名。二人は揃って反転し、手を振りながら急激に遠のいていく。

「あ、おい！」

「プレゼントは………いらないよな！　ほんじゃま、お幸せに！」

「ばいびいー」

「ちょっと待て、お前ら一体どこに………！？」

鵜方が思わず二人を追おうとしたのは、単に心配だったからだ。

親が居ない、という言葉が冗談だったとしても、家出か迷子である可能性は高い。しかも彼らは二人揃って薄着だった。

「くそっ………追いかけるぞ夜威子！」

「うん……………でも」

夜威子はゆっくりりと、前方を指差す。

「もっ……………誰も居ない……………よ……………」

信じられないことに　そこには既に、人影がなかった。

「おいおいマジかよ、どんだけ足速えんだよ!? ……って、何だこれ?」

鶺方は不審そうにそれを拾った。直径五センチ程のエメラルドの宝石が、銀色の鎖に繋がれている。なんだか高級そうだった。

「ネックレス…………? ああ、さっきあいつらが振り回してた…………落し物か?」

* * *

「いやあ、世の中面白い人がいっぱいだな、希」

「違うね、人がいっぱいいるから世の中は面白いんだよ」

力を行使し透明化。さっさと鶺方たちから逃亡した福地兄妹は、宛てもなく歩いていった。とにかく後先を考えないのが兄、元氣の主義である。

「それはさておき、元氣、これからどこいくつもり?」

「そうだな……………ピリオドの向こうへ行ってみようか……………!!」

「いいなそれ。でもどうやって」

「んなもんピリオドさんに聞けば分かる」

「あ、それならウチ、ピリオドさんさっき見かけたわ」

「まじか、どこで?」

「……………待って、近いつばい。しかも知ってる感じ」

不意に、妹の足が止まる。

「なにぃ…………? ピリオドさんは近いのか? しかもお前の知り合いなのか!」

「うっさい、さっさと頭切り替える!　ウチは敵が近いつて言ってるの!」

希は元気を罵倒する。

「オーライ、相手は探査タイプかよ？」

「違うね、こっちに真っ直ぐ来てるわけじゃない。闇雲っぽいよ。動きがバカのそれに近い」

「そうだよな。闇雲に探すのはバカだよな」

「闇雲に逃げてるウチらを見習って欲しいよねえー。で、どうする？ 逃げとく？」

「追いかける！」

結論を出しつつ、元気は目を瞑った。集中し、透明化。福地兄妹は生まれた時から、いわゆる超能力者であり、兄である元気は触れたものや自分自身を透明化する力、妹である希は異能を探知する力をそれぞれ有している。

「さーて、んで方向はどっちよ？」

「宝石一個で教えてあげる」

「やだね。納豆一パックで教えてくれ」

「えー、うん、いいよ」

生まれてから僅か九年。しかし希有な能力を有する双子を、政府は放っておかなかった。辛い目には幾度となく合わされたし、何度も何度も、元気たちは泣いた。

故に自由を勝ち取った今、元気はこう考える。

妹とともに、ずっと笑っていたい。

両親なんて必要なかった。自分と希、二人が笑えれば、それでいい。だからイタズラをする。面白そうなことに首をつっこむ。

希の笑顔が元気にとつての幸せだった。希は男っぽいから、つい張り合っつていつも冷たくしてしまうのだが、しかしそのやり取りを希が楽しんでいるということも元気は知っていた。

今の関係のまま、目の前のことを楽しむ。それが元気たちの生き方なのである。

だからこそ、危険と分かっているけど『追っ手を逆に追いかける』という発想が浮かぶ。黙って突っ立っているより面白い。相手の間

抜け面を拝んでおきたかった。

そうして十数分後。双子は現在、長身の男を追っている。

「にしても……なんであんにやるが……？」

元気は声を漏らした。なんせそいつ　竹之内丈は　サクリファイス　の人間である。元気たちを追っているのは　アルテミス　のはずだった。

「分かった、ウチが可愛いからだ。あいつ、熱心なウチのファンだよ、間違いないね」

「そんな幼女趣味の竹之内は捕まった方がいいな」

「ウチはついでに覗き魔も捕まった方がいいと思う」

元気は「僕知らないし」と首を振りながら、再度竹之内の背を見つめる。

「まさか……　サクリファイス　までが、僕らを？」

しかし、その理由が分からない。

「ウチらの能力が欲しいんじゃないかねえの？　暗殺用にさ。もしくはおっぱい用」

「後者の理由だったら喜んで協力するけどな」

数年ぶりに　サクリファイス　に捕まることを想像する元気。ゾツとした。もう二度とあんな生活には戻りたくない、そう思った。

サクリファイス　の非人道的な実験に比べれば、　アルテミス

なんてまだ可愛いものである。いや訂正、暗殺任務を強要してくる

アルテミス　もクソみたいな組織だ。結論　どっちもくたばれ。

「臭う……臭うぞ……血の臭いだ……近いな……イヴ……」

「……竹之内、今なんて？」

竹之内の独り言に、疑問符を浮かべる元気。さあ？　という表情を希が返した。

イヴ、という単語を元気は知らない。ピンときた。彼はひよっとして、自分たちではない誰かを追っているのではないか？

「絶対に見つけ出し……芸術的に殺してやる……」

「……なるほど」

元気は一人納得する。こう見えて頭の回転はとんでもなく速いのが自慢である。

要は、サクリファイスはイヴという何者かを追っていて、殺そうとしている。

そもそも元気は竹之内のことも好きではなかった。芸術芸術つてとにかくうるさく、いちいち新しい髪形を自慢してくる辺りも、途中からウザったくなった。

ぜひとも妨害したいね、これは。

非人道的な組織が人間を殺したがる理由。裏切り者の始末に違いない。クソ食らえである。

「希。先に見つけるぞ……イヴを。きつと可哀想なお姉さんだ。助けなくちゃな」

「四十代のおっさん、に一票」

それはない。そんなことがあつたら泣く。全力で泣く。

「ま……とりあえず追跡は続行つてことでいいか？」

「福地元気のストーカーモードを解放する時が、ついにやってきたね」

「こねえよ。お前こそ中野区のプリン・ア・ラ・モードを解放する時が」

「つまらないからそれ以上喋るな元気」

* * *

一方、好奇心旺盛な双子につけられているとは知らず、竹之内は血の臭いを辿っていた。

「面白え………。ただだけ殺したつつんだよ………しかも死体がねえ………」

竹之内はくつくと笑う。

「ま、デートの相手が『人間』であることを期待しようかね」

ぴちゃり、ぴちゃり。

比較的近くで聞こえ始めた血の音に、しかし竹之内は気付かない。

ただ、臭いだけを感じていた。焼け焦げる臭いの次に、竹之内が好む臭い。死臭。

「あーあ……最悪だな。『化け物』だったか……」

竹之内は自嘲する。駅からどう歩いてきたかも分からない、裏道のさらに奥の裏道。

箱を被った化け物が、そこで人間を雑に食い散らかしていた。

……ぐちゃり、ぐちゃり、と。箱を被っているのだから、口なんてないはずなのに。

「お前さんが、腹減ったつつんならそれで構わん。構わんが」

竹之内は口元を僅かにつり上げながら踵を返す。

「俺はまだ死にたくねええええっ！」

そうして、全力で叫んだ。

竹之内は全身全霊を賭けて逃げ出したのだった。

「ざっけんなよ、あんな化け物、無理だっつーの!!」

* * *

「あ、有り得ねえ……なんだあの化け物！ あれがイヴだったのか……!?!」

「少なくとも四十代のおっさんには見えねー。ウチの予想外れ」

冷や汗かきまくりの元気に、案外余裕そうな希。

二人は竹之内よりもさらに早いタイミングで引き返し、もれなく全力疾走中だった。

「裏切り者の処刑じゃなくて、逃亡した化け物の処理ってか……」

「つか、あいつの気、ハンパなさすぎて泣けるね。自信失くすわ、ウチ」

元気は考えを巡らせる。サクリファイスは元々、生命を直接

的に進化させるための研究を行う機関だった。カメラやクローンなんていう禁忌の遺伝子工学にまで手を伸ばすあの連中ならば、化け物を生み出しても何ら不思議ではない。今の状況は、こともあろうちに、それを逃してしまったということなのだろう。だとしたらさっきの血の海は？ 犠牲者は？

「あーあー、ふざけんな……後味わりいよ……！！」

元気は舌打ちした。しかし残念ながら、アレには太刀打ちできそうにない。

楽しいこともスリリングなことも大好きだが、みすみす死ぬつもりはなかった。

元気は僅か九歳。その考え方は突拍子もないようできて、しかし意外と打算的だったりする。

「えー、定時連絡定時連絡、竹之内口リ太郎が面舵いっぱい」

「ん？ ほっとけ、ほっとけ、もう竹之内を追いかける理由なんてないだろ！」

「それがね、反転してるわけ。さらに追加情報によりますとー、怪物さんの気が消滅っ！」

「……なんだって？」

* * *

「ようやく会えたな……『人間』」

竹之内は愉しそうに笑った。目の前にいる少女。化け物ではない少女。箱ではない少女。

プラチナブロンドの髪を靡かせる少女に向かって、静かに笑みを零した。

「はうあう……あのあの、な、な、なんだ……！？」

「やれやれ……俺のことも忘れてしまったか。『人間』のクセに生意気だぜ イヴ」

先刻とはまた違った場所に位置する路地裏。竹之内は袋小路に少

女を追い詰めていく。

じりじり、じりじりと。

「俺はお前さんを殺さなくちゃいけないのよ。世界平和のために、大人しく死んでくれ」

「はう……!？」

燃え上がる腕。熱さを感じずに炎を生み出し、操る。攻防一体型の能力だった。

「はうあ……や、やあ……やだ……」

「まあ、待て、先に一服させる。お前さんを散らす芸術的炎を、今考えている」

左手をポケットへ突っ込み、そこから煙草を取り出した。今年で二十二歳となる竹之内は決してヘビースモーカーというわけではないが、何かを考えるときは大抵煙草を吹かす。

考えることは主に、殺し方について。

「あの……あたし……」

「フウツ……。……決まった、そうしよう。今回のテーマは『カウントダウン』だ。正月も近いことだし、よ?」

竹之内は納得したように、啞えたばかりの煙草を路上へと投げ捨てる。

次いで、右腕を覆う熱が温度を上げた。渋谷で一番暑苦しいクリスマスイヴが始まる。

「カウントは五だ。一秒に一箇所ずつ燃やしてやるよ。五で右腕、四で左腕、三で右足、二で左足、一で胴、零で頭。……どうだい、なかなか芸術的だろ? 面白そうだろ?」

「やだ……やだあ……たす、たす、助ける……ソーマあ……」

「く、ははははっ! 助けなんてこねえよアホ。あーあ、デートは結局二回で終いか。いや、三回か? 俺としちゃあ、まだまだ遊び足りない年頃なんだがなあ……ま、いいか。そろそろカウントを始めるでしょう。華々しく。デートのフィナーレだ」

に、と笑う竹之内は右腕を上げる。一つ目のカウントを告げる、

その瞬間だった。

「悪いね竹之内のオッサン。もうデートはおしまいでーす」

「っーかウチがいんに浮気してんじゃねーよ
り太郎！」

・二話(25P)

2

声に反応する竹之内。同時に、そんな彼の前から少女が消えていた。

「……へえ。何をしに来たんだかなあ、福地兄妹？」

「助けに来ましたけど何か？」

元氣たちが姿を見せたのは僅か一瞬。既に声だけだった。異能、
クリア・ボデー透明人間の能力だ。

「あそ。つけられていたわけね……ま、いいか。フレディに捕まえておけって頼まれてたし」

「フレディ……？ あー、そうか、あのキモい気はフレディのか」

「希、そんなんも感じてたのか？」

「まあねえ。結構遠かったから気にしてなかったけど。遠いのは他にもいろいろいたし、さ」

元氣の横でうんうんと頷いてみせる透明な希。

チツと舌打ちをする竹之内は、きよろきよろと辺りを見回していた。既に元気たちがどこにいるのか分からない。そんな様子である。「あー、うざってえ、うざってえ。ホントいらいらする能力だぜ」「カルシウムとってないあんたの自業自得だよ。納豆でもいかが?」「希。そろそろ黙つとこうぜ。声で位置がバレちまう」「大丈夫つしょ。だってあいつアホだぜ、元気」「てめえら……大人をなめてんじゃねえぞ……!!」

竹之内が壁に当たり散らす。そんな様子を見て元気の口元が緩む。現在希が元気の左腕を掴んでいる状態であり、元気は余った右腕で少女の口元を無理矢理覆っていた。

「んー、んー」と少女がジタバタしている。少女と言っても、まあ、完全に年上なのだが。

少女は服ごと透明化している。元気の クリア・ボディ 透明人間 は触れたものを透明に出来る訳だが、その際に『集合』としてのイメージで範囲を拡張することが出来るのだ。洋服や血液、体内に住まう微生物に至るまで。三次元的な視覚認識ではなく、存在として透化を定義する。誤解を恐れずに言えば、それはもはや感覚だった。第六感に近い言葉に出来ない感覚を以って、元気は現実を高度に上書きするのである。

幻覚などではない。単に、光学的物理法則から逸しただけだ。そんな視覚に頼れない状況。敵がとり得る行動は、基本的に一つか二つに限られる。

耳を澄ますか、がむしゃらか。
「見えなくなつて関係ねえ……こんだけ狭いんだ。全部燃やし尽くしてやる!!」

竹之内が選んだのは後者だった。確かにこの狭い裏路地ではやかいかもしれない。

しかしその前に距離をとれば問題はない。竹之内を倒す気なんて、さらさらなかった。

ゆっくりゆっくり、元気たちは音を立てずにその場を離れてい

く。

轟々と燃え盛る炎、そのバチバチと爆ぜる音と巻き起こる風の音。その両者が、元氣たちの足音を上手く掻き消してくれていた。

(元氣！ 三秒以内、回り込んで十歩奥！)

(あいよ！)

希の小声に対し、元氣は頷く。今度は音を気にせず、すぐさま少女を連れだすまま前方へとダッシュ。回り込んでそのまま十歩ほど奥へと移動する。

「らあああああつ！！」

直後、壁に炸裂する火焰の渦。先ほどまでいた位置、及び七歩目辺りまでの位置が焼けていた。温度がどの程度なのかは分からないが、少なくとも触れたら火傷で済まなそうである。

危ねえ、危ねえ。元氣はふうと呼吸を整える。回避出来たのは希の能力のおかげだった。

異常探査サイコサーチ と呼ばれる力。いわゆる能力者を探し出すだけでなく、現実に及ぼす高度な上位概念の濃度を、色素によって感知することができる。

希は既にこの力の扱い方を感覚で知っている。色素が変化していく加速度から、未来に何が起こるのかをある程度予測することが出来るのだ。例えば相手が竹之内の場合なら、急激に色素が変化していく部分を知ること、『近未来に熱せられる箇所を予測する』ことが可能だ。

元氣と希は、二人合わされば相当な回避性能を誇る。相手は視覚に頼って攻撃することが出来ず、かといってがむしゃらに行動したところで、希に予知されかわされるのみだった。

「くそつ……どこに消えやがった……！！」

勝ちはずかしい。しかし、負けもしない。目的はあくまで、殺されかけてた可哀想なお姉さんを助けることだ。反撃することもなくひたすらに後退する元氣たち。いや、正確には反撃を試みたところで、竹之内の周りに展開されている『見えない炎の壁』に遮られるのだ。

「ま、逃げるが勝ちってヤツだな」

「相変わらずロリ之内、頭よわつ。まだ探してるよウチらのこと」
「ややあつて、戦闘から離脱することに成功したのだった。」

「はあ……もう大丈夫だぜ、喋つてもオツケー」

「ぶはあ……あ、あのあの……お前たち……？」

竹之内から離れること三キロメートル。ようやく元気は少女を解放した。

「あー、僕は通りすがりのエスパー、正義のヒーローだぜ！」

ビシツとカツコつける元気。

「そしてウチが悪の枢軸っ」

何故だかワイ字にポーズをとる希。

「は、はうあ……」

「で、あんたがイヴなのか？ さっき竹之内のアホにそう呼ばれてたけど……」

「はう、あのあの、いえす！ イヴ、イ、イヴォンヌ・ベレスフォードっ」

少女 イヴォンヌは顔を明るくして、名乗った。

黒いターゲットルネツクのワンピースを着ている。血はついていないし箱を被っているわけでもない。一瞬だけ疑ったが、しかし箱の化け物と彼女は別人のようだった。

「ベレスフォード……うえっ、まさか、あんたハワード博士の娘？」

希が、まじかよと小声で言いながら一歩下がった。

「あう、いえす！ あのあの……パパ、何か……うっ……」

突然、頭を押さえながら苦しみ出すイヴォンヌ。おいおい、大丈夫か？

「……すまぬ。あうあう、おかしい……パパのこと、思い出……、頭……」

「あー、いい、いい、別にいいよ。博士には僕らも世話になってね。」

サクリファイス 唯一の良心……っというかさ。ま、どうでもいいな、そんなことより無事で良かったぜ！」

「んに。ウチの優しさに感謝するべし！」

にっとな顔を交える元気と希。イヴオン又は少しだけ呆然とした後、

「ありがたきしあわせ……！！！」

御恩と奉公の時代を髣髴とさせる言い方で感謝を述べてきた。え、なにこの人。まあ、総じて逃げ出してきた人間なんてそんなものか。「ほいでさ、あんた追われてるんだろ、おねーさん？ でもあんた、能力ナシだよな」

「うんうん。ウチはこの子から何も感じないなー。感じるのはアホのオーラばかりで」

この寒波の中、Ｔシャツ一枚で平然としてる希も十分アホの素質はあると思うが。

「…………？」

「あー、いい、いい、分からねえならいいさ。けど、何で追われてるんだ？」

「あうあう……わ、分からぬ……」

「こつちのが分からぬわ！」

妹が茶化してくる。元気は首を傾げながら、

「サクリファイスの研究棟から逃げ出してきた……とかじゃねえの？」

「はうあ……分からぬ。サクリファイス、知ってる。パパが……」

「でも、分からぬ」

「ひよっとしてさ、記憶がねえの？」

半信半疑で、元気が尋ねた。

「多分、いえす……でも、分からぬ……渋谷……呼ばれている……あたし」

「渋谷に呼ばれている……？」

「渋谷正春さん四十代独身、趣味はストーカー、に電話で呼び出さ

れたに一票」

「ねえよ」

「だよー」

ふざける希を前に首を捻るイヴォンヌ。ちくしょう、ややこしくなった。

「ん、つてことはなんだ、僕らひよつとして似たもの同士？ ほら、僕らもなんだかよく分からない理由で追いかけてるし、その上行く先とか未定なんだぜ！」

「だね。渋谷に来たのは質屋がたくさんありそうだったから。いや、結局行つてないけどさ」

「ほんとだ、そついや行つてないな質屋」

「さつさと金に換えないとね、宝石。ウチが換えてきてやるから寄越せよ元氣」

「やだね。お前すぐ失くすじゃん」

「あんたもじゃん」

確かに。

「はうあ、パパとか、ママは……？ あのあの、時間遅い……」

「あ、親はいないよ。とつくに死んだ。家もなければ帰る場所もないさ。あー、でも、金はあるかな？ 正確には換金前だけどさ」

言いながら、元氣は背中につ背負ったリュックの中から宝石箱を取り出した。

箱を開き、中から紅く煌く指輪を取り出してみせる。

「それは……？」

「わかんね。でも、絶対高く売れるぜ？ 宝石、デカいしさ！ そうだ、あんたにやるよ！」

満面の笑顔で、元氣はその指輪を差し出した。

「え？ え？ あのあの」

「いいから。いいだろ、希？」

「うん、でも、一個だけだからね。あ、そだ、ウチの納豆もあげるよ」

同じくリュックの中から納豆を一パック取り出す希。嫌がらせにしか思えない。

無理矢理、イヴオンヌの掌の上に指輪と納豆を載せる。彼女は困惑した様子で、指輪と二人を交互に見比べていた。

「一緒に笑おうぜ、お姉さん。大丈夫、生きていけるさ。目的がなくなつて、家がなくなつて、僕らは生きていけるっ！ 時計見てみるよ、もう〇時だけ？ さあ、ご一緒にっ」

元気たちは顔を見合わせた後、同時に声を張り上げる。

「メリークリスマス！」

イヴオンヌはそんな二人の様子を呆然と眺めた後。

自然と、涙腺を緩ませた。

「はうあう……あの、メリークリスマス……」

そうして、騒がしい二人はイヴオンヌの前から嵐のように消え去った。なんでも、フレディという男が彼らに接近中らしい。探査手段を手に入れたみたい、だとか、精度がそれなりに高い、だとか、少女のほうがかや慌てているようだった。

彼らはイヴオンヌの前から立ち去る前に、こんなことを言っていた。

「また会ったら、その時は一緒に逃げよう！ なあに、フレディを除けば、僕らの能力は誰に対しても無敵なんだ！ 撒いたらきつと戻ってくる！ だからそれまで捕まんなよ！」

「ふふん、仕方ないからウチの子分にしてやるよ。後でね」

言葉を返す間もなく、彼らは消えていった。残されたのは孤独な静寂と、貰った指輪のみ。

「指輪……」

宝石なんて似合わない、とため息を吐きながら、イヴオンヌはそれを胸ポケットにしまった。

「……一緒に、逃げる……」

双子の言葉を思い返す。魅力的な提案だったが、しかし受け入れ

るわけにはいかない。

思い出すのは炎を扱う異能者。追われる身である自分。巻き込みたくなかった。

彼らも追われているとは言っていたが、彼らと違ってイヴオン又には何の能力もない。

足手纏いにしかならない　そう思った。

イヴオン又・ベレスフォードは、一人で孤独に逃げ続けるしかないのである。

「あう。いい人……いっぱい……日本……」

胸元に指輪の重さを感じながら、イヴオン又は一人呟いた。

ナンパされていたところを助けて貰ったり、お腹が空いていたところを助けて貰ったり、炎を扱う異常者に襲われていたところを助けて貰ったり。

「助けられてばっか……申し訳ない」

不意に自分の力不足を痛感するイヴオン又だった。しかし、どうすればいいのだろうか？

そうして、イヴオン又が脱力するのと同じ時。

「ヤア……マタ会いましたネ？」

仮面を被った金髪の男が、優しい調子で話しかけてくるのだった。

「あなた……」

「人を探してましてネ。どうやらこの近くにいそうなので、尋ね回ってるんデス」

「あのあの、先刻、ありがたきしあわせっ！　パン、美味しかった！」

「いえいえ……」

仮面の男は丁寧にお辞儀をする。

「はうあう……」

釣られてぺこりと上体を曲げた。

「デ……見ませんデシたカ？　『赤髪の双子』なんデスが……」

「…………え」

瞬間、イヴオンヌの身体が硬直した。赤髪の子。もしかそれは先ほど指輪をくれた…………。

「知りませんか？」

「ごくりと、固唾を呑んだ。まさかと思う。しかしその男からはおかしい臭いがした。」

イヴオンヌはこの臭いをよく知っている　血の臭いだ。

疑心暗鬼になる。彼らを追っているのは、ひよっとしてこの男なのではないか…………？

今更ながら、怪しい身なりが気になり始める。…………だから、嘘を吐こうと思った。

「あのあの、み、見てない」

「そうでスカ…………アッチの方に行ったんデスね？」

「…………え？」

愕然とした。男が指差した方向が、正しかったからである。何故？　まさか、心を読まれた…………？　超能力…………？　さっきの二人のような…………？

思わず口元を手で覆う。

「正直に答えてくれて、アリガトウ…………安心してクダサイ。私は紳士デス」

仮面の奥で、笑っているのが分かった。決して紳士などではない。その、男は。

「タダ、ちよっと見つけて…………臍物ぶちまけさせる、それだけデスから」

正真正銘の、殺人鬼だった。

「アア、ソレと…………今度私に嘘を吐いたら、」

仮面の男は、仮面を上向きに外しながら、笑う。

「貴女も殺しちゃいマスからネ？」

「…………っ」

悪寒に襲われて刹那。男の姿が不意に遠のいた。信じられない速

度だった。

ふと、イヴオン又は二人が言っていた言葉を思い出す。

なあに、フレディを除けば、僕らの能力は誰に対しても無敵なんだ！

今思えば、フレディとは外国人の名前である。外国人。フレディ。まさか。

そうして、地面に落ちている、死神が描かれた一枚のタロットカードに気付いた。

寒気を感じながらもそれを手に取り、裏を捲ってみる。そこに書いてあった英字のサインを見つめて、イヴオン又は思わず息が止まりそうになった。

『Freddie』。

* * *

「厄日にも程があるだろうっ！！」

筒木朝護が叫んだ理由は、決して鵜方に敗北したからではない。それはあくまでさつきまでの話であり、今は違った理由でキレていた。そう、愛車の原付きが盗まれていたのである。

「どこのどいつだよクソ……ッ！ ああ、確かに僕は気が立っていた……気が立ちすぎてて、鍵を差し込みっぱなしだったさ……けどだからといって！ 盗むか、普通！？」

ガン、と近くのガードレールを蹴飛ばした。反動が思ったより大きく、すぐさま蹲る朝護。

「どいつもこいつも……僕をバカにしゃがって……ん？」

そこで、ふと気付いたのだった。朝護が原付きを止めておいたはずの場所に、紙とプレスレットのようなものが置いてある。

「なんだこれ……」 『プレスレットとバイクを交換しようぜ。大丈夫、このプレスレット、相当高価だから、多分。あ、メリークリスマス』……」

朝護は読み上げた後、くしゃつと紙を潰した。唇を震わせながら、とにかく手にとってみる。

「……………なんだよ、これ」

ふざけやがって、と叫ぶつもりだったが。

「バリかつこいいじゃないか……………!!」

シンプルなものを好む朝護だが、このブレスレットに関してはその限りではなかった。蒼い輝きを放つ宝石が長方形の形で埋め込まれており、それを覆うように銀色の帯が巻かれている。なんとというか、ビビツときたワケである。もしかすると、原付きなんかより、よっぽど。

「まあ……………許してやるとしよう……………!!」

筒木朝護は、割と単純な男なのだった。

* * *

「うーむ……………売ったらいくらぐらいなんだろなあ、これ？」

渋谷区に聳え立つとあるマンションの一室。鵜方はコタツの中に足を入れながらネットクレスを眺め、うーむ、と唸り続けていた。一体、どうやって返したのか。

素直に警察に届ける、なんていう手もあつたわけだが、モノがモノだけにはばかられた。万が一、盗品だったら……………と思うと、警察に届け出るのは何となく恐ろしい気がしたのだ。

大体、あんな時間に子どもが渋谷の街を出歩き、こんな高価そうなものを振り回していた時点で、状況的にアブノーマルすぎる。

ちなみに鵜方と夜威子は、あれからいくらかその場で待っていたわけだが、伸びていた朝護の件で警察に職務質問されそうになり、慌てて逃げ出してきたのだった。

夜威子は中学生だし、鵜方は高校生。どちらも未成年な上、中学生と一緒にというのは何となく犯罪の匂いがする。こんなことで捕まったら洒落にならない、というのが鵜方の意見だ。

そんなわけで、もはや終電はなくなっていました。

悲しいことに、某誰かさんを泊めるハメになっちゃいました。

「……………あなた。似合ってるわ」

にやあ、と口元を不気味に歪めながら、夜威子が鵜方の首にネックレスをかけてくる。

「おい、どういつつもりだ」

「……………？……………プレゼント交換」

それが何か？ とでも言いたげに首を捻る夜威子。鵜方はどこから突っ込んだらいいか分からず、一瞬ツツコミ迷子となった。

「まず第一に！ プレゼント交換するのは自分のものを交換するんだ！ 他人のものを俺に渡してどうする！？ そして次に、俺はあなたじゃねえ、鵜方総真だ！ 勝手にてめえの脳内妄想を現実化するつもりは最後につ！ 俺はてめえとクリスマスごっこなんぞするつもりは微塵もねえ！」

一切の遠慮なく捲くし立てる鵜方。しかし、そんな鵜方の言葉を受けて、夜威子は何故だか顔を赤らめる。いわゆる、DMなのだ。

「大体俺はなあ、こんな女みたいな装飾品は……………」

「待って」

鵜方がネックレスを乱暴に外そうとすると、夜威子が両手を前に出し、ストップを表すジェスチャーをした。難色を示しながらも、鵜方の動きがぴたりと止まる。

「あん？」

「双子座のラッキーカラーは緑色……………それ、つけていた方がいい……………と思う」

夜威子は、鵜方にかげられたネックレスの宝石を指差した。淡いエメラルドグリーンの輝きが、怪しく揺らめいている。そういや当たるんだよなあ、コイツの占い。

鵜方はふう、とため息を吐いた。

別に夜威子に占い能力があるわけじゃない。単に夜威子が読ん

でる雑誌の占いが、やたら当たるとい話だ。

ネックレスをつけていたら、双子に会える確率も上がるかもな。そんなオカルトな妄想をしつつ、鵜方は「分かった、分かった」と言葉を返す。

「で……………あなた。すでに、お風呂が沸いているのだけど、」

「おう、一人で入れ。そして一生出てくんな」

「……………けち」

無表情で、ケチ呼びわりしてくる夜威子なのだった。

「大体なあ、この後の展開は分かりきってんだよ、こっちは。てめえの兄貴がアホみたいな形相でてめえを連れ出しに来て、そんで…

……………

「……………さつき、朝護の地図アプリからこの場所削除しておいた。朝護はバカだから、アプリがないとここまで辿り着けない……………だから平気……………」

「ああ……………さいですか……………けど執念で探し回るだろうよ？ さつきみたいに、さ

がつくり肩を落としながら、みかんの皮を剥く鵜方。もうどうにでもなれという感じだった。

「……………執念なら、私も負けない……………ぐうぐう……………」

「いや……………それに滅茶苦茶巻き込まれてる、俺という可哀想な人間がいてだな……………」

「大丈夫……………可哀想じゃない……………むしろ……………かわいい……………

……………」

「いや、可愛いとかそういうことじゃない。

「はあ……………腹減った」

「……………だったら、私を食べ」

「うん、お前を食すくらいなら俺は潔く餓死を選ぶわ。……………ちょい

コンビニ行つて来る」

「だったら、私も……………」

「てめえはさっさと風呂でも入ってる！」

「……………分かった。シャワー浴びて、ベッドの上で待ってる……………
ずっと……………」

「よし、ははは、漫画喫茶にでも行って来ようかなー」
無機質に笑いながら玄関のドアを開け、鵜方は外に出る。

「ったく……………なんでアイツはあんな……………つか寒っ」

肩を震わせる。肩を寄せ合おうとするクリスマススの恋人たちの気分が、なんとなく分かったのだった。無論、意味は違うが。

「……………いいや、十五分だけ……………コタツ入ってからにしよう。どうせ
夜威子は長風呂だし……………」

時折自分に甘いのは、多分父親譲りである。

* * *

「いやー、気持ちいい風だなあ、元氣ーっ！」

「寒いだろ！ 僕は気持ちよく風邪が引けそうだ！」

バイク、自分、妹を透明化し、爆走。福地元氣は九歳にして、足すらまともに届かない原付きをモノにしていた。元より、運動神経はいい。兵器として死ぬほど特訓をさせられた経験を持つ元氣にとつて、このようなオモチャを動かすのは朝飯前だった。犯罪うんぬんや倫理観なんてどうでもいい。今はとにかく遠くへ逃げることにそれが最優先だった。

「元氣！ このままロシアまで行こう！ ウチ、万里の長城が見たい！」

それは中国だな。つか海渡っちゃってるし。

「言いたいことはいろいろあるが、寒いから却下！」

「そういうあんたは！」

「沖繩！」

「遠いわアホ！」

「ロシアより近いわアホ！」

「つか、いったん渋谷戻ろうよ元気！」

「ああ、そうか、そうだな、そろそろイヴ姉さんのところへ行っても平気そうか？」

「じゃなくて靴！」

「靴……？ 買い物か？ いや、でも質屋やってなかったじゃねえか！ 金がねえよ」

「じゃなくて靴飛ばしちゃった。あは」

「……まじ？」

「まじまじ。あははー」

「振り落としていいか？」

「ひどっ！ うわ、まじ蛇行すんなし元気！ ウチが死んだらみんなが悲しむっ！」

「うっせえ！ で、どこで落としたんだよ？」

「だから渋谷の方だって！」

早く言え。

「まあまあ、粘り強く探そうよ、納豆みたいにさ！」

「……ネバーギブアップ、ってか？」

静まり返る。あー、うぜえ。

「元気のボケには粘り強さが足りてないと思うな、ウチは」

「お前の靴も粘り強さが足りてねえんじゃねえか」

「ほんとだよ、なんて軟弱な靴なの」

「靴のせいにすんな！」

「これだからゆとりは」

「お前だ！」

そうして、二人は来た道を引き返していくのだった。

* * *

「靴……？」

『そ、そうッス！ フレディさん、靴があつたッス！ 小学生用の

……」

「場所八……？」

『渋谷から西に、世田谷通りに向かう途中の……』

「それが……？」

『いや……フレディさん言ったじゃないツスか、関係ありそうなことは逐一報告しろって！でも、怪しいツスよ、コレ。傷のつき方と、汚れが……なんていうんスカね、車に乗りながら、窓から靴を放り投げて、それが何台かの車に轢かれたような、そんな感じツス。まだ新しいツスよ、これ。つかこんな時間に子ども用の靴とか、有り得ないツスよ』

「ふム……そうデスカ。ひよっとシテ……足を手に入れたの力モしれないデスね。目撃証言の急激な減少……ふム……原付きカラ靴を落とシタ……間抜けな妹ならあるいハ……」

フレディは熟考する。本人とは限らない。偶然かもしれない。しかし他に情報もない。近くのギャングを利用し、渋谷一帯を搜索させていたわけだが、やはり人の手には限界がある。

「信じてシテ、仮に……ソレが福地兄妹のモノなら……おそラク彼らハ……」

当然、拾いに戻ってくるはずだ。

『フレディさん？』

「場所を教えてください。ソシテ、今すぐ私の元へ……バイクヲ……」

フレディはそれだけ言つて、携帯電話を置んだ。

* * *

「おいおい、リアル首都高バトルかよ！」

「元気、安心しなよ、ここ一般道だから」

希とは対照的に、元気は焦りに焦っていた。洒落になっていなかった。

運良く靴を発見し、喜んでいたのも束の間。原付きを置いて、透明化を解いて靴を拾った瞬間、数名の男たちから襲撃を受けた。

幸い、致命傷は回避出来たし、希を守ることも出来た。透明になつて距離を取れば、みすみすその辺の奴等に攻撃されることはない。

原付きを囲んだ男たちに向かって元気は石を投げつけ、施設で学んだ体術を駆使して次々に吹っ飛ばす。元気が何とか原付きを取り返し、逃走すべく跨った時。

そこに、フレディがいたのだ。

「にしたつて、なんで気配に気付かなかつた……！？ 希っ！」

「あいつそういつのコントロールするの上手いんだよ。あとぶつちやけ眠かつた」

なるほど、多分後者が正解だ。まあ、仕方ない。

「おい、それよりウチに代われ元気。ドリフト決めてやるからさ！ バビューンって！」

「そんな暇はねえよ！」

元気は吠える。サイドミラーに映る『フレディのバイク』を横目で見ながら。

同時に思い出していた。フレディ・ブラックバーンの、その反則的なスペックを。実のところ、元気たちはフレディと圧倒的に相性が悪いのである。

「やつかいだぜ……音を覚える能力……！！！」

超能力とは、一人一つだけと決まっているわけではない。極稀に、二つ以上の異能を有する者が存在するのだが、フレディはまさにそれだった。

アソル・ピッチ
絶対音感

。それがヤツの一つ目の能力である。絶対音感といつても、巷で言われているような生易しいレベルではない。フレディは人の鼓動を記憶し、視界に頼らずに攻撃したり、あるいは人の嘘を見抜いたりすることが出来るのだ。

もちろん欠点もある。持続性と範囲制限だ。音を覚えるといつ

てもそれは短期的な話で、長期的に覚えられるわけでもなく、さらに百メートル以上離れば音の区別自体が不可能になる。

故に今まで逃げてこれた。フレディは元気たちの鼓動を覚えていなかったし、百メートル以内に近付きもしなかったからだ。フレディがここまで近付いて来れたことには驚きだが、今となつてはどうでもいい。既に鼓動を覚えられた上に、バイクでヤツがぴつたりとついてくる。元気の異能である クリア・ボディ 透明人間 も、 アブソル・レッチ 絶対音感 相手には全く通用しない。

しかもバイクの方が馬力が上である。赤信号を抜ける際だつて、視覚化されない元気たちに比べればフレディの方が幾分安全だ。相手の車が避けてくれる上、フレディは車の音を感じること、視界に頼ることなく回避することが出来る。

三百六十度、全方位に目がついているようなものだった。

「裏道を攻める……!!」

元気は好んで、狭く曲がりくねった道へと入っていく。カーブが多い方が小回りの効く原付きに有利であり、むしろ信号の多い直線を進んでいくのは危険に思われた。加えて、フレディが跨る黒のバイクは大きい。コーナーリングは苦手 そう判断した。

そして、その予感は的中する。

「ナメた真似ヲ……」

「うっせ、なめてんだよ!」

「ウチは納豆なめたいんだよ!」

直線でフレディが追い上げ、元気がコーナーでかわす。希が野次る。その繰り返し。

三人の思いが交錯しながら、カーレースは続く。

数分経つて場所は渋谷区。渋谷駅から二駅ほど離れた、比較的辺鄙な場所に来ていた。

元気は既に透明化を解いていた。ここまで来たら警察に通報されようが関係ない。むしろフレディだけがスピード違反で捕まれば

いいとさえ思っていた。

一切車が通らない裏道で、元気はアクセル全開。しかし相当に追い詰められていた。

「もう狭い道も慣れマシたからネ……！！ チェックメイトです！！」

「くっそ、ずりいんだよ、バイクとか！」

「だからウチに代われっつての！」

二人が声を張り上げると同時に、フレディの魔の手が背後より迫ると同時に。

突如目の前に、高校生くらいの男が飛び出してきた。いや、おい、ちよつと待てこれは。

「あ、危ねええええつ！！ 避ける、避けてくれええええつ！！」
元気は青ざめながら、力いっぱい叫ぶ。道が狭すぎる上に現在速度は百二十キロ超。避けれる自信なんてなかった。この距離ではブレーキだつて間に合わない。……激突必死。このままでは、轢き殺してしまう。思わず元気が目を瞑ったその瞬間。

信じられないことに、その男は、素手で原付きを 止めた。

トラックにぶつかったかのような激しい衝突音。フレディのバイクだけが無残に宙を舞う。

「……あれ。ひよつとして、俺、まだ生きてる？」

「ぐう……なんだ、てめえ……人間、なのか……？」

男が手をついて両手を倒れている。息は荒く、恐怖に歪んだ視線を朝護へと向けていた。

「ふふ……ははははっ！ ああ、人間だとも！ とてもおかしいことに！ 僕は人間だ！」

一方朝護は、左手首に装着したブレスレットを撫でながら、高々と笑ってみせる。

きつかけは喧嘩を売られたことだった。そもそも朝護は鶺方のマンションに殴り込みをかけに行くつもりだったのだが、原付きが盗られていた上、地図アプリから鶺方のマンションの住所情報が削除されており、上手くいかなかったのだ。躍起になって探しつつ、ブレスレットの美しさを堪能していたところ、三人組の男にぶつかり、喧嘩に発展したというわけだ。

不意に不思議な力が発現し、男を吹っ飛ばすことが出来たのは、決して偶然ではなかった。

サイコキネシス
念動力。朝護は確信する。この力は、ブレスレットによってもたらされたものであると。

喧嘩が一気に楽しくなった。初めての経験。超常を体現する快感。クズな人間を弄ぶ愉悦。

朝護が念じれば、駐車場に停めてあった乗用車でさえ操作することが出来た。動いているものを操作するのはパワーバランス的に難しかったが、止まっている人間であれば、動きをそのまま止めたり、あるいは浮かしたりすることも出来るようになった。

使えば使うほどに新たな使い方を思いつく。それが楽しくて、仕方ない。

気付けば二名を半殺しにしており、残った一名に関しても、もれなく次の一撃で。

「これなら、どうだ？」

「がつ……………アウ……………」

半殺し、終了。

男たちが使っていたナイフを二本同時に動かし、それを両肩目掛けて飛ばしたのだった。無論、男の動きを封じた上で。

膝をつき、そのまま力なく倒れるリーダー格の男。朝護は満足そうにその様子を見ていた。

「僕は天才だ……………ブレスレットの力を……………引き出す天才……………！！
間違いない。これは天が僕に与えた力だ……………僅か十二回で、コツを完全に掴んだ……………！！」

震えが止まらなかつた。勝てる。これなら鵜方にだって勝てる。強い男が好きな妹だって、きつと帰って来る。ああ、そうだ、まずはゴミどもを掃除しよう。救えないこの街のクズども、クリスマスに浮かれている勘違い野郎ども、生きる価値のない敗北者ども。今まで自分をバカにしてきた連中に後悔を味合わせてやる。

試しに横断歩道を真っ直ぐ歩いてみようか。ぶつかつたヤツが馬鹿みたいに喧嘩を売ってくるだろう。例えばそいつを返り討ちにしてみたらどうか？ 実に、面白そうだ。

「ふふ……………はははははっ！」

丁度全部で八人を半殺しにしたところ、だろうか。

朝護は別に悪に染まりたいわけでもなかつた。単なるストレス発散が目的であり、目に付くヤツを制裁出来ればそれで良かった。十人くらい仕留めたら、鵜方の家を探すつもりだった。

単純に九人目、今回たまたま目に付いたヤツが、

「はうあう……………あのあの……………」

「なんだい僕う？ 俺の邪魔しないでくれるかなー？」

女を襲おうとしていた。ただ、それだけのことだった。

「貴様はとりあえず殺すが、今僕は気分がいい。一撃で勘弁してやる。」

朝護は『止まれ』の標識を捻じ切り、念力を駆使しながら、それ

を片手で易々と振り回す。

硬い金属の棒が、少女を襲おうとした男を一撃で弾いた。バキリと、鈍い音が響く。

「が、は……っ」

それで、終わり。何のドラマもなければストーリー性もない。一方的な殺戮シヨ！。それはそれで面白かったが、あまりの張り合いのなさに、ため息が出そうになる。

強者の感覚。朝護はそれを味わっていた。自然と、気持ちが尊大になっていく。

わざわざ助けてやったんだから、見返りくらい欲しいものだな。

そんな台詞が、朝護の頭をよぎるのだった。

「あ、あの、あのあの、ありがたきしあわせ……！！」

ペこりと一生懸命お辞儀をする外国人女性。そこで朝護は初めて気付いた。

「貴様………：鴉方の知り合いか？」

実はあの時朝護は見ていた。鴉方の元からクラウチングスタートで去っていく女の姿を。

「え？ ……ソーマ？ ああの……いえす！ ソーマのこと、知ってる？」

食いつく少女は、心底嬉しそうだった。まるでヤツに惚れているかのように。

カチンときた。思わずスイッチが入る。

「ム力つく女だ……総真総真と……ああ、うげえ………そうだな、決めた。貴様、僕と来い」

「え？」

「貴様に僕という男の名を刻んでやるよ。一生忘れられないほどにな」

にたりと、悪しき笑みを浮かべる朝護。その視線はホテル街へと向いていた。

念動力 ならば、女一人ぐらい簡単に連れ込める。

「え……うつ……はうあ……身体……動かな……」

「ああ、そうだ。動く必要なんてない。この世の全てが僕のものだ。僕が動かし、僕が支配する。前からずっとそうしてみたかった……僕はいつだって、中心を目指していた……」

くつくと口元を歪めながら、少女の手を引いて進んでいく。

「警察だつてきつと僕には何も出来ない……僕は最強だ……!!」

そうして少し歩いたところで、朝護は街の異変に気付いた。

「おい……なんだよこれ……どうなってる……？ 八八八……冗談だろう？」

否。異変なんていうレベルではなかった。そこら中の壁に血が飛び散っていたのである。

「警察は何をしている……!!」

足が震えるのが分かった。八方を恐怖で塞がれる。『何かがある』ここに。人ではない何かがいる そんな気がした。

よくみると、警官の制服のようなものがたくさん散らばっていた。どうなっている。どうなっている。どうなっている。

「コイツか……まさか……ブレスレット……他にもあるのか……」

朝護は左腕に輝く蒼の宝石を覗き込みながら、考えを巡らせた。

例えば仮に、この宝石を持つ人間が他にもいたとして。そいつらが、力を使つて。

不意に頭を過ぎるのは、朝護の原付きを盗んでいって、代わりにこのブレスレットを与えてくれた『誰か』の姿。

「……まあ、いい。来るならきやがれ……!!」

姿の見えない誰かに対して、静かに宣戦布告をする朝護。

「呼んでいる……」

「何？」

突然、少女が口を開いた。動きを封じられながらも、口を動かした。

「ここ……ダメ……」

「だから何がだよ……!!」

朝護は何だか怯えさせられているような気になって、少女の胸元に掴みかかった。

ゴロリとした何かが、手の甲に触れる。

「……っ?」

ピリツという、僅かな衝撃が奔った。知っている感覚が、甲より全身に広がっていく。

「……この感覚……まさか、貴様……?」

朝護は少女の胸ポケットの手を入れる。 あった。やはり、あった。

「指輪……指輪……これは! この力はッ!!」

真紅の指輪を手に取りながら、朝護の顔から笑みが零れ落ちる。

「ふふふ……ふ……はは ははははははっ!!」

指輪を左手の人差し指にはめる。サイズは意外にもぴったりで、リングが第三関節を覆った。

力が漲る。そうか、これらは効果が重なるんだな。なるほど、なるほど、なるほど!

「僕はより強く……より高貴に……! ふふ……ははははは! 外人! いいぞ! 誰に貰った!? この指輪を誰に貰ったんだ貴様は!?!」

嬉々として少女に尋ねる朝護。しかし少女は「答えず、「ここはダメ」と小さく呟くばかりだった。

「ふん……答えるつもりがないなら身体に聞くまでさ。丁度、下半身の サイコキネシス 念動力 も試したかったところだ……!」

朝護は真顔でどうしようもない下ネタを言い放つ。ホテルは目前邪悪な笑みを浮かべながら、少女を連れてその古びた建物へと踏み入るのだった。

「ハッピークリスマス……ってか？ ははははははははっ！」
力は、人を狂わせる。

* * *

最初に弾き飛んだのは大型のバイクだった。なんだかんだで結局四十分ほどコタツで暖まってから家を出た鵜方は、コンビニから帰る途中でいきなり原付きに轢かれたわけで。

否、轢かれたわけではない。鵜方は「素手で止めた」のだから。ただし、止めたのは一台だけだ。鵜方は自らががっしりと掴んだ原付きの背後より、もう一台大型のバイクが迫っていた。だなんて知る由もなく、故に、後方のバイクだけが勢いを殺せず宙を舞った。鵜方は前方の原付きを押さえ込めただけで精一杯だったのだ。

もつとも、鵜方的には押さえ込めただけでも十分奇跡だったわけだが。

というより、自分にこんな力があるなんて、知らなかった。

これが有名な、火事場のクソ力ってヤツか……などと、鵜方は内心興奮の色を隠せない。

ともかくにも今の状況を結論すると、三人無事で一人が絶対死んだってことである。

自分が生き残ったことで頭の中がいっぱいだった鵜方だが、冷静に考えると、そういえば大型バイクと一緒に人間が物凄い勢いで吹っ飛んでいたような。

「あ………ああ、うあああああっ！」

とにかくどうしたらいいか分からなくて、とりあえず叫んでみた。こつこつ場合どうなるのか、こつこつは生身の人間だけと無傷だから罰金とかの支払い義務が発生するのだろうか。というか、あちらに吹っ飛んだ方は生きてらっしゃるのだろうか。いや、生きてくれ頼む。マジで頼む。

なんて、現実逃避に鵜方が全力で浸っていると、

「え、あれ……ウルトラアンちゃん!?」

鵜方ががっしりと止めた原付きから、知っている二人がぴよんと降りてきたのだった。

「え……ええええ!? お前ら原付き……なんだ、どうなってるんだ!?」

「こ、こつちが聞いてえよ! あんただんだけ怪力なんだ!?」

「あー、いったあ……ウチ、鞭打ちかも……いったえ」

向かい合う三人。鵜方も元気もまるで状況が把握出来ないのだった。

「え、つか、てめえら小学生だと思ってたが、ちげえのか!? しかもてめえ、ノーヘルじゃねえか! 渋谷の夜道なめんな! つか、あの人大丈夫か!」

「うっせえ、小学生なめんなよ、僕はIQ180オーバーなんだぞ! 多分あんたよか頭いいし! で、どうやって止めたんだよ!」

あ、そうだ、あいつだ、こんなことしてる場合じゃねえ……逃げろ、あんた!」

「ああ? ウソつけガキが! 止めたのは鍛えてっからだよ! 俺はアメリカのスラム街で修行してきたんだ、原付きくらい止められるっつーの! で、え、なに? 逃げる? いや、いくら俺でもそれはないわ……やっぱ罪は償わねえとな……」

「なに黄昏ぶってんだよ! あいつは殺人鬼だ! 僕らは追われている! 罪とかそんなん関係ねえよ! 死にたくなけりゃあ今すぐ逃げろ! あいつは生きてる! そうだろ希!」

「あー、うん、確率で言えば百パー、割合で言えば十割生きてんね」

「ああ? 殺人鬼? ウソ吐け! んなもん一年に一人いりゃあいい方だろうが! ……大体あの人はどう考えたって重傷を……」

大声での言い争いの後、鵜方は振り向き、そして固まった。

『ピンピンしていた』のだ。

ヒビの入った仮面を装着した男が、平然とそこに立っていた。

「やれヤレ……厄日デスね……一体何が起こったのかサッパリ……」

まあ、イイデス」

カタコトの日本語を喋りながら、金色の長髪を揺らす、白仮面の男。一步、一步と、鵜方たちの方へ寄ってくるのだった。

「くそ……………起きやがったか……………！！ 希、乗れ！ あんたも乗れ！」

元気は急いで原付きにまたがり、声を荒げる。

だが、しかし。

「……………はっ。最悪だぜ……………動かねえ……………当然か……………あんな衝撃だもんな……………」

元気は舌打ちして、原付きを乗り捨てた。鵜方が止めた衝撃で、あるいは後方からバイクにぶつかられた衝撃で壊れてしまったのだろう。むしろ、後部座席に乗っていた少女が無事だったという時点で奇跡。

「……………希？」

元気の動きが停止する。いつの間にか、希が倒れていたのだった。

「希……………おい……………ウソだろう……………？」

鵜方は言葉を失くす。鞭打ち、というさつき希が言っていた言葉が、頭を過ぎった。心臓が不整に高鳴る。あるいは、これは、鵜方のせいだ。

「お前……………」

「……………」

固まる元気。そんな様子を仮面の男が愉しげに眺めていた。

「アラアラ……………自爆デスか？ アホらしい死に様デスねえ」

「黙れよ」

「怖いデスねえ、福地サン？ 仮にも一緒に暗殺チームを組んだ仲間じゃナイですか？」

「黙れって言ってるんだよ……………！！ 今ではめえの相手をしてる場合じゃねえ！！」

「同感デス。じゃ、死にたくナケレば、宝石箱を渡しなさい」

「んなもん知るか！！」

「じゃア」

とん、とん。

とても軽やかな音が二回聞こえたかと思うと、

「力づくデ」

「ぐっ……っ!？」

刹那にして、仮面の男のナイフが元気を貫いた。

「……!!」

鵜方の中で、何かが爆ぜ上がる。元気は左掌で仮面の男のナイフを防いでいたが、鵜方の眼には映らなかった。

殺人鬼。その言葉だけが頭の中で繰り返され、そして。

身体が、動いた。

「あああああああああつ!!」

大地を蹴り、一気にトップスピードへ。拳を握り、間合いを支配する。辺りの暗さは武器。ナイフを持った相手には慣れている。避けるか、防ぐか、振るか、突くか、あるいは投げるか。ナイフを投げられたら大人しく食らうしかないが、我慢は出来る。投げないのなら間合いをとれば回避できる。防御行動なら連撃に移行するだけである。

問題なし、ノープロブレム。どんな手を使われようが、全てぶっ飛ばすのみ……!!」

「やれヤレ……逃げ出さないのハ賞賛に値しますが……身の程知らず過ぎマスね?」

仮面の男がとった選択は、しかしどれでもなかった。『何もしない』。それがヤツの選んだ選択肢。

ああ、そうかい なめやがって。

「だめ、だ……そいつの……細胞錬金セルナルケミ は……!!」

元気が叫ぶ。しかし鵜方は聞き耳なんてもたない。ただ拳に体重を乗せて、敵の仮面を叩き割るのみだった。

「この俺にぶっ飛ばされる!!」

「フフフ……」

「肉体を金属へと変える能力なんだ……!!」

衝突した。激突した。ぶつかり合った。

碎ける、音がした。それは鵜方の拳か。

あるいは。

「……………エ？」

一瞬だけ静寂が辺りを包み込み、次いで、轟音とともに衝撃が奔った。

バキリという、金属が碎ける音。それは仮面が割れた音であり、顔面が割れた音でもあった。

「ナ……………ナアアアアニイイイイイーツ!?」

衝撃波とともに風が弾けたように吹き荒れる。仮面の男は遙か後方へ吹っ飛んでいった。

啞然とする元氣。それ以上に呆然とする鵜方。えーと、あれ？

男は遠くで仰向けに倒れたまま動かない。約十五秒に渡り、リアルな静寂が訪れるのだった。

「ウソだろ……………おい……………フレディは不死身と言われてる男だぞ

……………」

「いや……………知らん……………俺もびっくりした……………なにこれ……………俺こんな強かったっけ……………」

「防御も回避も攻撃も、何もかもがトップクラスの暗殺者だぞ……………」

「いや……………知らん……………だから知らねえって、俺は何も知らねえぞマジで、いやマジで」

「大体あんた……………逃げろつつつてんのに何でフレディ殴ってんだよ……………有り得ねえだろ……………」

「いや、そりゃあ殴るだろう。なんかムカついたし。やばそうだったし。そして何より、」

鵜方はビシッと仮面が碎けた男　フレディを指しながら、言った。

「あいつアメリカ人だし」

「いや、アイツイギリス人だぜ……………つか……………希……………そうだっ、希!」

慌てて希の元に駆け寄る元氣。不思議なことに、自らの掌の怪我に関してはノーリアクションなのだった。

鵜方は少しだけ考えてから、やはりそうすべきだよなと、一つの結論を出す。

「おい、お前さ、もし良かったら」

「なあ、あんた、頼みがあるんだが」

鵜方と元氣は互いに見つめ合い、同時に言葉を紡いだ。

「うちに泊まっていかねえか？」

「あんたんとこ、泊めてくれねえか？」

「しかし、あんたとは気が合いそうだぜ」

「奇遇だな、俺もそう思ってた」

後始末を終えた二人は、希と夜威子が待つ部屋へと戻る。生きるんだか死んでるんだか分からないフレディを、とりあえず適当に脱がして武器を奪って、キツく縛って『ゴミ捨て場』の古びた生ゴミバケツの中突っ込んでフタをして、その上ガムテープで封をしておいた。

そこは廃ビルのゴミ捨て場であり、誰も利用をしない場所であり、人目にも付かない。

金属化が解けてないから生きているのだらう、と元氣は判断をしたが、鵜方は止めを刺そうとはしなかった。いくら相手が殺人鬼だとはいえ、殺すのは気がひけた。かといって警察に突き出すというる聞かれて大変そうだったし、署の前に放置、というのも誰かが何かをしたら危なすぎる。路上で寝かせたまま放置はもっと危険だと判断し、結果、なるべく簡潔に人目に付かないところへ捨てよう、ということになったのだ。

よくよく考えるとバイクが盛大に吹っ飛んだわけだし、警察が駆けつけてきてもおかしくはないはずなのだが、そんなことはなかった。見た限り邪魔そうだったので、壊れた原付きとバイクも適当に端に寄せておいた。なお、バケツを塞ぐガムテープはわざわざコ

ンビニで買った。

そうして、今に至る。

「……………冷えピタ買ってきてって言ったのに」

「うん、悪い」

鵜方は早速、夜威子に謝っていた。実は元気の妹（どうやら元気が兄らしい）である希は体調を崩しており、若干熱っぽいのである。フレディという男の処理のついでに冷えピタを買ってくるつもりだったが、間違えてガムテープを買ってきてしまったのだ。フレディ用に。

さすがの鵜方も「とりあえずガムテープを貼っておいたらどうだ」とは言えなかった。

「いいよ、別に…………ウチ、元気だし」

希が口を開く。彼女は既に意識を取り戻していた。

というより、一種立ち眩みのようなものだったらしい。彼女曰く今は大丈夫、とのこと。

鵜方は正直ホツとしていたが、まだ微熱があるのだ。出来ることなら彼女には早く良くなって欲しいと思うし、そのためならなんでも協力するつもりだった。

「あー、その、なんだ、もっかい買ってくるわ」

「……………いい。私が行く」

鵜方が自らパシリを志願すると、先に夜威子が立ち上がった。なんだかちよつと怒っているようである。やばいな、なんか信用失ったかも。そんな気がする。

「おい、夜威子、お前コンビニの場所分かるのかよ？」

「分かる」

夜威子は小さくそう言って、そのまま出ていった。不安である。

なんせ筒木朝護と筒木夜威子は、見事なまでに方向音痴兄妹だ。まあ、しかし執念の力があるか。朝護同様に。

「……………なんであんたら、僕らに優しくしてくれるんだ…………？」

ふと、元気が尋ねてくる。希もこっちを見ていた。鵜方は「そう

だな」と枕詞を置いて、

「この街じゃあ、誰もが家族みたいなもんさ」

思いつきで適当な言葉を並べてみたのだった。

「あ、そうそう、お前らのこと探してたんだよ。これ、落とし物の
ネックレスな」

鵜方のその言葉を聞いて元気は「あぁっ」と声を出す。いや、むしろもつと早く気付け。

* * *

「はい、そこまで、チンピラちゃん？」

ホテルに入ろうとした朝護を止めたのは、二十代くらいの赤メツシユの男だった。目つきが悪く、口の端に不敵な笑みを浮かべている。記念すべき、十人目だった。

「馬鹿な男だ……僕の前に立ちはだかるなんてね。まあ、いい、丁度良かった」

朝護は胸を高鳴らせる。順番が逆になったが、これはこれで良かった。プレスレットと指輪。魔法のアイテムを二つ組み合わせた場合に何が起るのか。それを知るチャンスだった。

鵜方の知り合いを犯すのは後回しでいい。まずは存分に遊ぼう。

「おいおい……おいおいおい……マジかよ？」

赤メツシユの男が乾いた笑いを零す。その視線の先には、潰れた看板があった。それは朝護が今試しに『圧縮』してみたもの。同時に朝護は確信する。力が増したのだと。

人体を圧縮して骨ごと砕く。物質を圧縮して弾丸のように撃ち出す。その逆に引き伸ばして四肢を引き千切る。車を膨張させてガスを散弾銃のように弾き飛ばす。残念ながら、どれもこれも相手を殺してしまいかねない危険な思い付きだった。

「はっ……」

朝護には、少女を金縛り状態にしたままで戦うくらいの余裕があった。

バキバキと、周りに停めてある車を圧縮して脅しかけてみる。

大抵はここでビビッてしまはずだが、しかし男は楽しそうにこっちを見てくるだけだった。

「……貴様、僕が怖くないのか？ それとも無知か？ 今貴様の周りで起きている異常は、僕によって引き起こされているんだぞ」

「プレスレットに……指輪か？ 宝石箱の中身なんぞ聞いてなかったが、なるほど。そいつがいわゆる、賢者の石か……ククク」

その反応で朝護は察した。こいつは今までの奴らとは違う。知っている プレスレットと指輪の秘密を、知っている。

「試しにさ、俺にその潰した車ぶつけてみるよ。そしたら分かるさ」
「……………死ぬぞ？」

「死ぬと思うか？」

男の挑発に、朝護は苛立ちを覚える。そうか、だったら遠慮なくいかせて貰うよ。

遠慮なく!!

「潰れるッ！」

「燃え尽きるッ!!」

殺すつもりで投げられた銀色の乗用車は、しかし一瞬にしてポロポロと崩れていった。

「……………な？」

男は笑う。彼の周りを灼熱が覆っていた。

「分かっただろ？ お前さんがどれだけすげえ力を手に入れたところで 年季が違う」

朝護を鬼の如く睨みながらもその口元は笑っていた。朝護の思考はしばし止まっていたが、すぐにぞくぞくとした反応が身体中を駆け巡り、ぱあ、と顔が明るくなった。

ああ、そうだ、これだ。雑魚にはもう飽きた。殺さないように気遣うことにも飽きた。いいんだな？ いいんだよな？ 全力出し

ていいんだよな？ どうせ死なないよな？

「死んでも僕のこと恨まないって誓える？」

「恨まねえさ。死ぬのはお前さんだからな」

視線が交差する。さーて、どうしようか。炎の壁。何度かは分らないが、鉄をも一瞬で消し炭にする程の熱量だ。触れたらやばい。逆に言えば、触れなければ問題ない。

「直接骨を折る！」

一歩退きながら右手を前に出し、握る。感覚的に敵の座標を感じ取り、圧縮。

「念動力 とはやりあつたことがあんだよバーカ！ 当たらなけりゃあ、意味がねえ！」

外した。朝護の サイコ・キネシス 念動力 には時差がある。狙った位置からターゲットがズレれば、圧縮は失敗に終わってしまう。金縛りと同じだ。そして相手はそれを知っている。

「なら 落ちろ！」

朝護はコンクリートごと地面を砕いた。相手の足場を崩した上で、浮いたコンクリートと鉄筋の破片を、

「防げるものなら防いでみる！」

全て弾丸として、全方位から放つ。

同時に、気付いた。そういえばヤツの炎は地面を溶かしても焦がしてもいけない。あるいは選べるのだろうか？ 熱するものと熱さないものを。

「はははっ！ 面白いことしゃがる！ だが俺は学んだ！ もう手加減はしねえ！ 福地のように逃がしたりはしねえ！」

男は無事だった。結構深くまで地面を砕いたはずだが、爆音とともに余裕綽々で飛び出してきた。その音の意味は、次の瞬間に理解する。

「後学のために覚えておけ少年！ 懐がお前さんの死角だ！！」

脚部で小さな爆発を起こして、猛進する赤メツシュ。その腕の周りに業火が渦巻いていた。

それは線の攻撃だった。対して朝護の攻撃は点での攻撃である。直感で、悟った。この速度で迫ってくる敵には、命中することなんて、ない。

ならば。

「ああああああああああっ！」

大気を圧縮。炎を吹き飛ばすぐらいに、練成、練成、練成、練成、練成。そして、放つ。

「ぐああああああっ!？」

弾けとんだ。まるで大砲を撃ったかのような衝撃。それは、朝護自身をも吹っ飛ばした。

「おおおおおおおーっ!？」

肩が脱臼しそうになる。そのまま後方へ飛ばされ、足がつき、転がり、跳ねて。

「が、は……っ」

最後に、後頭部を思い切りぶつけてしまった。朦朧とする頭、抜けていく力。

そうして朝護の記憶は、ここで途切れる。

* * *

「ふう………こ、これで………ばっちり？」

イヴオン又は汗を拭う。意識を失った男。鵜方の知人と思われるその男を、ゴミバケツに突っ込んだところだった。イヴオン又はこの男に襲われかけたわけだが、しかし炎の能力者と相打ちになってくれたおかげで、結果的に助かったのだ。静かになった後、イヴオン又は男から指輪とプレスレットを奪った。プレスレットが彼に力を与えているようだと言付き、これ以上悪いことをさせてはいけないと考えた。なんせ、鵜方の知人なのだから。

その上で、ここまで引っ張ってきたのはイヴオン又はの優しさである。

地面は割れていたし、現場はあちこちボロボロ。このままでは彼が逮捕されると思ったのである。それに、風邪を引いたらまずい。暖かい場所で寝るべきだと考えたイヴオン又は、とりあえず暖かそうな密室であるゴミバケツに突っ込んだのだった。

ゴミバケツは二つあって、一つはガムテープで止めてあった。剥がすのは大変そうだったので、もう片方のバケツに突っ込んでおいた、というわけである。

なお、炎の能力者に関しては完全に放置した。

「はうあー……こっちも、大変……」

何故だか大破している大型バイクを横目で見ながら、とりあえずイヴオン又は近くのコンビ二へと向かった。看板が丁度見えたのは幸運。とりあえず暖を取りたいと思った。

「はうあー!？」

ぼーっとしていたイヴオンが、コンビ二入り口の自動ドアで誰かにぶつかつたのは、それから五分後の話である。

「あ、あのあの………すまぬ!」

「………こちらこそ………あれ」

サンタクロースの格好をした、その金髪で小柄な少女。イヴオン又は彼女に見覚えがあった。

「ソーマの………嫁!」

「総真の………愛人?」

* * *

夜威子がプラチナブロンドの口下手少女を連れてきたときの衝撃は計り知れなかった。

え、なんで? なんでこんな時間に突然、キボン又さんが我が家に来てくれるのでしょうか。

鵜方はテンパった。とにかく焦った。別に全然構わないのだが、何にせよテンパった。

「はっ、ガキだなあ、元気は。納豆は健康にいいんだぜ？　なあ、希」

「そうそう、もういつそ節分に納豆撒いちゃおうよ。ここに」

「お前ら本当にやりそうだから止めてくれ」

そうして、騒がしいクリスマスが過ぎていく。不思議なことに、この五人はお互いに面識があつた。だからこそ笑えた。いつになつても眠らない。枕が飛んでくる。鵜方が脱ぎ捨てた靴下が飛んでくる。鵜方が隠していたはずのエロ本までが飛んでくる。ため息を吐いて、一言。

「寝ろっ！！」

・四話

・五話

・六話

・七話

・八話

・エピローグ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8935z/>

最高電波家族（超能力バトルモノ）

2011年12月28日01時57分発行